

カルガモの魚類捕食に関する事例報告

水野千代

〒380-0826 長野県長野市北石堂町1190

カルガモ *Anas poecilorhyncha* はユーラシア大陸東部のバイカル、ウスリー地方から中国を経てインドまで繁殖分布し、冬は東南アジアに渡って過ごすものが一部いる。日本では全土で見られ、北海道では夏鳥であるが、本州以南では留鳥として分布する(中村・中村 1995)。日本における本種の食物はイネ科植物の種子、マコモ *Zizania latifolia* の根など植物質がおもであるが、ゲンゴロウ *Cybister japonicus* 等の水生昆虫、タニシなど貝類、スナヤツメ *Lampetra mitsukurii* も知られている(清棲 1978, 羽田 1962)。また、長野県林務部(1993)によると、ハンターが撃ち落したカルガモがワカサギ *Plecoglossus altivelis* を食べていたことが報告されている。

筆者は、猟期にハンターによって撃ち落されたカルガモ 1羽を譲り受けた。その個体はオイカワ *Zacco platypus* をくわえており、解剖によって胃内容物を調べたところ、計30匹のオイカワが飲み込まれていたことを確認したので報告する。

カルガモが撃ち落された場所は、長野県長野市丹波島(36°37'N, 138°11'E, 標高356m)の犀川と裾花川の合流地点である。その地域は西から山間地を流れてきた犀川が長野盆地に出て川幅が広がり、北から山間地を流れてきた裾花川が合流し、丹波島付近では川幅が約550mとなる場所である。岸边にはハリエンジュ *Robinia pseudo acacia*, ツルヨシ *Phragmites japonica*, ススキ *Miscanthus sinensis* などが生える。丹波島橋左岸側の河川敷内はグランドなどの裸地が多く、堤防の両側は建物が連なっている。犀川本流は丹波島橋の上流で右岸から左岸へ蛇行し、その頂点付近へ裾花川が流入している。合流する内側の左岸堤防から約150mの位置に灌水域(大きな水たまり)があり、長さ約60m, 幅約10m, 水深30~50cmで裾花川とつながっており、犀川本流に近い南側の岸边は、橋脚を守るためテトラポットが置かれ、そのすき間に砂が詰まった状態で、その他の岸边は大人の握り拳大の礫であった。水中および灌水域の岸边に植物はみられなかった。

カルガモは2004年 2月 5日14時に、灌水域から飛び立ったところを、ハンターによって 3羽が撃ち落され、そのうち 1羽が当日17時頃に筆者に届けられた。届けられたカルガモは半開きの口にオイカワを 5匹くわえていた(図 1)。消化器官を解剖した結果、食道からそのうに25匹飲み込まれており、合計30匹のオイカワを確認し、また、オイカワ以外の食べ物は確認できなかった。オイカワはあまり消化が進んでおらず、30匹がほぼ原型をとどめていた(図 2)。オイカワの測定値は標準体長31.7

2005年10月13日 受理

キーワード: オイカワ, カルガモ, 魚類捕食



図 1. オイカワをくわえたカルガモ

Fig. 1. A Spot-billed Duck with a pale chub *Zacco platypus* in the beak

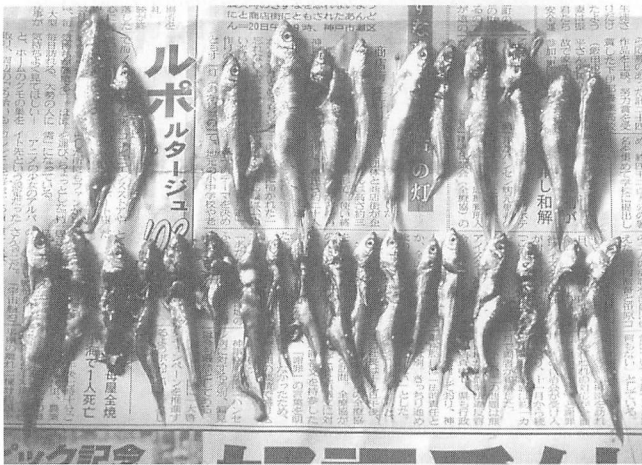


図 2. カルガモの口, 食道, そのうから検出された30尾のオイカワ

Fig. 2. Thirty pale chubs *Zacco platypus* retrieved from the mouth, esophagus and crop of a Spot-billed Duck.

～66.0mm(平均48.9mm), 湿重量0.3～20.0g(平均0.9g)であった。中村(1952)は、オイカワの当歳魚は秋までに全長7.8～9cmに成長すると述べており、測定値からオイカワは前年生まれの稚魚と推定された。

諏訪湖でのカルガモによるワカサギの捕食例について、日本野鳥の会諏訪支部の林(私信)は、早朝、漁師が網を打った際に傷つき弱ったワカサギが湖面に浮いている状況、すなわち潜水しなくても食べられる条件が揃っていたためであろうとしている。同じように今回のオイカワの事例も、犀川本流の脇の灌水域にオイカワが群れていたために、それがカルガモにとって簡単に捕食できる条件であったのでは(田中 私信)とのことであった。中村(1952)はオイカワの稚魚の棲息場所について、冬季は沈床、杭、杵、蛇籠等のある水流のほとんどない50cm内外の深みに群れをなして見られるが、浅く水流のない場所にも多く、また、伏流水のある水温のやや高い水溜り、湧水の流入するところにも群居するのがみられると述べている。したがって今回の事例は、植物食が基本のカルガモであっても、魚がたやすく捕食できる条件が揃った場合には、魚を捕食することを示している。一般的

に、動物の肉や魚は植物に比べたんぱく質が豊富で、エネルギー量も多いといわれおり、カルガモにとっても動物質の食物の方がエネルギー効率が良いのかもしれない。

狩猟鳥であるカルガモは、ハンターの協力が得られれば胃内容物を調査することが可能である。採食行動や餌利用の観察とあわせ、今後はカモにどの程度魚食性があるかについて、資料を蓄積していきたい。

最後に、撃ち落されたカルガモを提供してくださった田中達雄氏、松本健喜氏、有意義な助言をいただいた日本野鳥の会諏訪支部の林正敏氏、信州大学の中村浩志博士に感謝申し上げる。

引用文献

- 羽田健三. 1962. 内水面に生活する雁鴨科鳥類の採食型と群集に関する研究 X III. 雁鴨科鳥類の食物. 生理生態 10(2): 98-129.
- 清棲幸保. 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑 II. pp. 845-847. 講談社, 東京.
- 長野県林務部. 1993. 諏訪湖周辺における鳥類の生息状況とその環境への影響. pp. 69-70. 長野県林務部, 長野市.
- 中村一雄. 1952. 千曲川産オイカワ *Zacco platypus* の生活史(環境, 食性, 産卵, 発生, 成長其他)並にその漁業. 淡水研報 1(1):2-25.
- 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑・水鳥編. p. 13. 保育社, 大阪市.

A report of fish-eating by a Spot-billed Duck *Anas poecilorhyncha*

Chiyo Mizuno

1190 Kitaishido-cho, Nagano-shi, Nagano 380-0826, Japan

The diet of Spot-billed Ducks *Anas poecilorhyncha* primarily consists of vegetable matter and rarely includes animal matter such as fish. However, a Spot-billed Duck was confirmed to eat fish in the Sai River in Tambajima, Nagano, central Japan. The duck was shot by a local hunter at 14:00 on February 5, 2004. A total of 30 fry of the pale chub *Zacco platypus* were retrieved from the mouth and crop of the dissected duck. The duck was assumed to be eating these fish confined in a pool of water when shot.

Key words: *Anas poecilorhyncha*, *fish eating*, *Zacco platypus*